



| | |
|--------------|---|
| Title | アジア太平洋論叢 第11号 序 |
| Author(s) | 赤木, 攻 |
| Citation | アジア太平洋論叢. 2001, 11, p. 1 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/99957 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

このところ、アジア各地を歩いてみて、「一変した」というのが実感である。最初にアジアを訪れた1970年前後と比較すると、都市はもちろんのこと農村もすいぶん変容した。目に映る景観や人々の日常生活の姿は申すまでもない。私にとっての「あのバンコク」ももう存在しないように、それぞれにとっての「あの……」はなくなりつつある。

しかし、そうした変容もさることながら、私が実感しているのは、一般の人々の外世界についての知識ないしは情報の飛躍的な増加である。たとえば、私が長く付き合っている東北タイ農村の村民の日本についての知識や情報は、20年前と比較するとその量といい正確さといい、雲泥の差である。理由としては、教育とメディアの発達を指摘できるであろう。そして、こうした外世界に対する知識や情報の量と質の大幅な増大は、翻って自分たちが属している社会を見る目を養いつつある。ごくごく一般の人々が、自分たちの生活、社会や国家を相対化できる力がつき始めつつある。それが、わたしが感じている「アジアの一変」である。ゆっくりではあるが進展が見られる地方自治体拡大の動きなどの今日のアジア社会変動の大きな背景として、考えておく必要があるだろう。

さて、アジア太平洋研究会から『アジア太平洋論叢』(第11号)をお届けする。特集は「東南アジア社会の基層を考える」と題し、東南アジアの諸問題に関する報告を収めた。扱った時代にも差はあるが、いずれの報告も東南アジア社会の基層を貫く特質を浮き彫りにしようとした労作である。上述の「アジアの一変」の過程でも、いずれは自らの社会の特質＝文化が問題になってくるはずである。関係論考を一読いただき、ご叱正をたまわれれば幸いである。

また、この号を、この3月末で大阪外国語大学を退官される大野徹先生(地域文化学科アジアⅡ講座)に捧げる。ご自身にも寄稿いただきこの上ない喜びである。実は、これまでこの論叢へ最も多く論考を寄稿されたのは大野先生である。それだけでも、アジア太平洋研究会へ大層ご尽力いただいたことになる。この場を借りて、お礼を申し上げるとともに、ご健康とさらなるご活躍を祈念するしだいである。

2001年(平成13)年3月

赤木 攻
(アジア太平洋研究会・会長)